

かわ とこ 川 床 地 区 遺 跡

県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴二期地区
川床工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告



B-168号全景

1985.3

宮崎県新富町教育委員会

序

新富町教育委員会は、宮崎県の委託を受けて、昭和59年度川床地区県営農村基盤総合パイロット事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその概要報告です。

本調査では、古墳時代初期の円形周溝墓、方形周溝墓を含む工墳墓群 195基が検出されました。これはこの時代の墓制を知る上で貴重な研究資料となることと存じます。

調査は、宮崎県教育委員会をはじめ、北九州市立考古博物館館長小田富士雄氏、九州大学助教授西谷正氏、鹿児島大学助教授上村俊雄氏等の指導と協力によって行ったものです。

また、発掘調査に際しましては、県一ヶ瀬土地改良事務所及び一ヶ瀬土地改良区、宮崎県農業開発公社、地元町民各位の御理解と御協力をいただき心からお礼申し上げます。

昭和60年 3月30日

新富町教育委員会

教育長 小田 幸一

例　　言

1. 本書は、川床地区の県営農村基盤総合パイロット事業に伴い、昭和59年度に実施した川床地区遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、新富町教育委員会が主体となり、有田が担当し、県文化課永友良典氏、北郷泰道氏の指導をあわせた。
3. 本書に使用した図の作成は、下山覚（鹿大生）、有田があたった。
4. 本書の製図は、有田、桑畑礼があたった。
5. 本書に使用した方位は、すべて磁北である。
6. 本書の執筆、編集は、有田が行った。
7. 出土遺物は、新富町教育委員会で保管している。

目　　次

I. はじめに

1. 調査に至る経過..... 2
2. 遺跡の立地と環境..... 3

II. 調査の概要

1. 調査区の設定と概要..... 4
2. 1～2号墳の造構と遺物..... 4
3. 土墳墓群の造構と遺物..... 6

III. まとめ

8



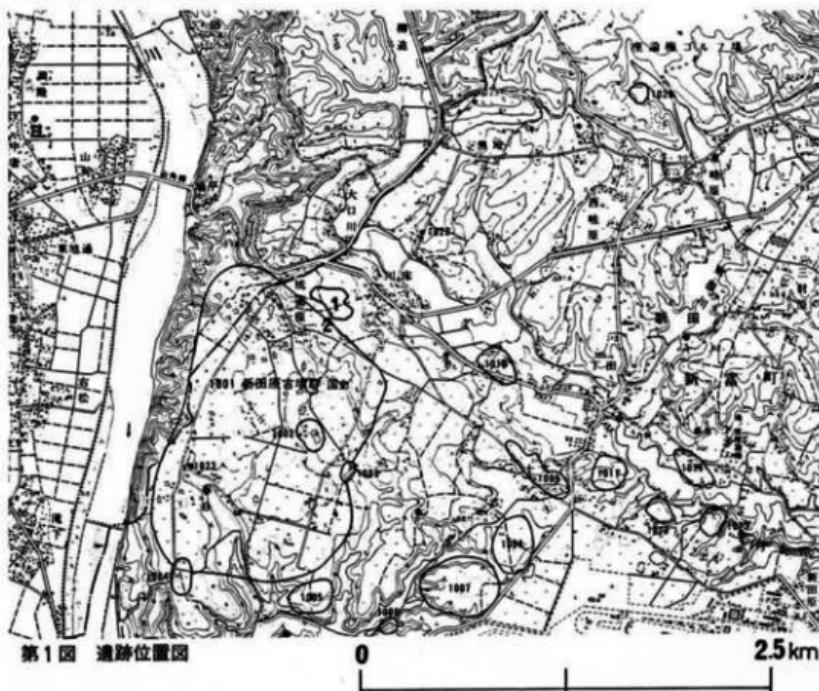
図版1 川床地区遺跡航空写真1(真上)

I. はじめに

1. 開発に至る経過

昭和58年度から59年度にわたり、川床地区において県営農地基盤整備事業が進められた。事業地内の埋蔵文化財の調査は、昭和58年8月、分布調査が行われ、土師片等が表採され、かなり広範に遺跡の存在が確認された。新富町教育委員会、宮崎県一ツ瀬土地改良事業所と事業地内に散在する新田原古墳を含めた埋蔵文化財について協議した結果、新田原古墳群の保護については、古墳周囲の削平を行わず、ほぼ現状のまとし、削平を行う道路、水路敷の一部については、事業施行上、現状保存は困難であり、消滅する部分については、記録保存の措置をとることになった。調査は、新富町教育委員会が主体となり、有田が担当し、県文化課北郷泰道氏、永友良典氏に指導をあおいだ。

調査の結果、本遺跡の中、土壙墓群については、古墳時代（初期～）の遺跡であることが判明し、円形方形周溝墓を含めて195基の土壙墓が確認されている。また、新田原74号墳北側からは、古墳の削平されたものが二基検出されている。発掘調査は、昭和59年8月15日から昭和60年1月31日まで実施した。



2. 遺跡の立地と環境

新富町は宮崎市北約20kmにあり、その町域は、一ヶ瀬川北岸の沖積平野と野地・原などと呼ばれる洪積台地に占められている。この洪積台地は、広く宮崎平野に広がるもので平坦面の顕著な段丘地形となっており、その代表的なものに標高120m級の茶臼原面、90m級の三財原面、70m級の新田原面がある。^{注1}

当遺跡は、新富町大字新田字川床・谷畔・祇園原に所在し、北に鬼付女川水系に開析された谷により、新田原台地（通称）に残された三財原面（標高90～91m）に立地する。

川床地区周辺に所在する遺跡は北東600mに、集石道構の露出した大谷川遺跡があり、南南東700mには近世の窯跡である茶碗山遺跡があり、南東2,200mには、弥生時代後期の集落跡である新田原A遺跡がある。^{注2}またこの台地南西麓にあたる祇園原地区には、国指定史跡新田原古墳群最大の前方後円墳である弥吾郎塚（48号墳）を含む古墳群が散在している。さらに南南西1kmには、昭和58年3月に発掘調査された瀬戸口遺跡があり、縄文時代早・前期の集石造構20数基が検出されている。この他に旧石器時代の遺跡として祇園原・川床・黒坂が半径1.5km内にあり、尖頭器・細石核・ナイフ形石器等が採集されている。これらの遺跡周辺には、各所に台地を小さく開析した湧水があり、古い時代の遺跡の立地には、適していたのであろう。

注1. 新富町教育委員会「新富町の埋蔵文化財—遺跡詳細分布調査」1982

注2. 同上報告書

注3. 昭和56・57年調査、昭和60年度報告書刊行予定。

図版2 川床地区遺跡航空写真



II. 調査の概要

1. 調査区の設定と概要

調査区の設定は、昭和58年8月の分布調査で土師器片の散布していた畠地の中、道路敷について全面発掘することとし、各々道路番号により区とした。その他については、事業地内の最高位面に沿う形で計画されている幹線2号道路と直交する5号道路の交差点を基準に各々道路の中心線にあわせ50×50mのグリッドを設定した。

調査は、昭和59年8月15日～60年1月31日まで行い、交差点を中心とした地区に土塙墓群とこの南200mの7号道路区において、円墳のカットされた周溝及び主体部（土塙）が2基検出された。なお、当地の基本層序は、第Ⅰ層（表土・耕作土）、第Ⅱ層（黒色土層）、第Ⅲ層（アカホヤ層：第Ⅰオレンジ）、第Ⅳ層（黄褐色土）、第Ⅴ層（小白斑を含む黒褐色土）、第Ⅵ層（褐色土）、第Ⅶ層（第Ⅱオレンジ）であり、ほぼ南北に残る最高位面から東側川床地区及び西側の祇園原地区に向って若干の傾斜をもつため、その地区における層の厚さは、第Ⅱ、第Ⅲ層が比較的厚い。

2. 1～2号墳の遺構の遺物 (7号道路区)

この地区では、耕作土を除いたアカホヤ層上面で古墳のカットされたものが2基検出されている。1号墳は、周溝を含め東西8.60mを計り、ほぼ正円形であり、周溝の巾は0.8～1.2m、深さ凡そ15cmである。主体部の土塙は、長軸約3.6m、短軸約1.2m、深さ約40cmである。

出土遺物は、主体部から短剣1点（長さ36cm、身巾3.0cm）と木棺の接合に使われたと考えられる釘6点が出土している。

また、これより北側15mの地点には、深耕により相等の擾乱を受けているが、1号と同様同規模の円墳があり、これを2号墳として

図版3 2号墳遺構検出前



図版4 2号墳遺構検出後

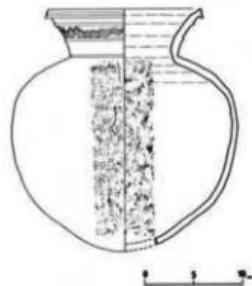


おく。これは、主体部の北側コーナーが、わずかに深さ4cm残っているほかは、大型農機によるすき込みの為、コーナーは歴然としない。また、遺物についても搅乱のため破碎されているが、主体部分より鉢の回りの獸形が巴様に変形したものを8~9列配した獸形鏡（復元径9.1cm大）1面が出土している。併せてこの主体部擾乱土から青色のガラス小玉（径2.0mm大）2個、乳青白色のガラス小玉（径1.5mm大）17個の計19個の小玉が出土している。他に、直刀1振分と考えられる鉄製品が出土している。この比較的搅乱を受けていない北北西側周溝埋土より、自然釉のかかった甕片が20数点出土している。

この北北西側については、工事立会の下に調査したが、この他には、遺構の検出はなく、また、遺物も採集されていない。



図版5 周溝須恵器出土状況



第2図 1号墳出土須恵器実測図



第3図 7号道路区遺構分布図

3. 土壙墓群の遺構と遺物

この地区からは、この群を構成する墓域を一部地点を除きほぼ全掘しており、円形周溝墓・方形周溝墓を含めて、総数195基を検出している。この中、円形周溝墓と断定し得るものは、調査前において比高1.2mの墳丘をもったB-168号（19.6m、溝巾1.8~2.2m）や径24mを計るB-49号、など20m級の大型のものが3基あり、C-108号に代表される14~5m級のもの7基、C-14号に代表される径8~10m級が9基ある。これらより他に、隣接する円形周溝の溝を共有した形で10~20基の周溝墓が存在する。また方形周溝については、完全に囲繞される形のものがないとはいえ、B区の南隅からC区南隅にかけて、5~6基が検出されている。土壙墓の基模については、周溝をもつものの中には長軸3m位、短軸2m位のがあるが、残るほとんどは、長軸1.8~2.4m、短軸0.7~1.5mの範囲におさまる。そしてこれらは、B-158号に代表される土壙墓（図版7）、と小口、長側板の痕跡を残すB-119号（図版8）や、小口部を堀り残したB-71号（図版9）があり、小口部に人頭大の川原石を使用したもの、ほとんど小口、長側板の痕跡を残さないものなどがある。

遺物は主体部より、鉄器が195基中、73点出土している。その主なものは、有茎の鉄鎌であるが、弥生的要素を残す大型の無茎鉄鎌も、B-72号（図版12）とA-5号から各1点出土している。他に、素環刀がB-49・167号から各1点、鉄斧がA-1・B-5号より各1点出土している。土師器は未整理ではあるがB-49号周溝から莊内式併行期の複合口縁壺片が出土しており、C-121号周溝より、小形丸底壺（布留式？）が出土している。

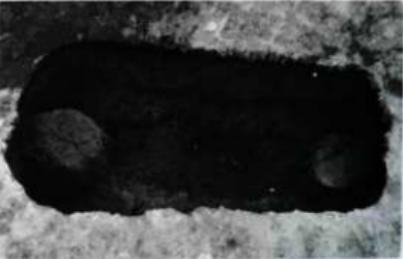
図版7 土壙墓 1



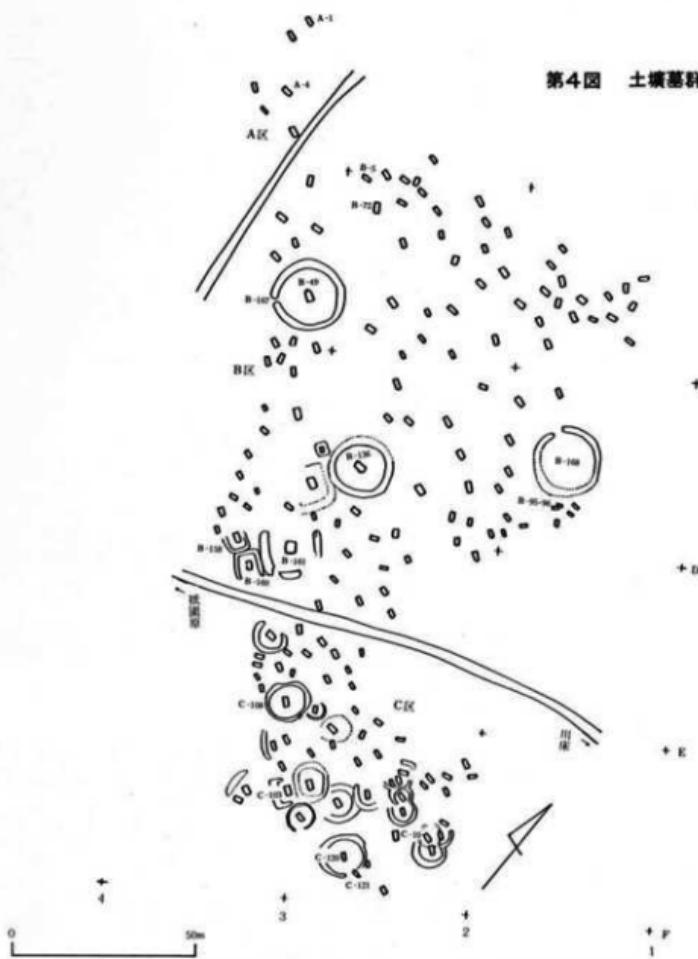
図版8 土壙墓 2



図版9 土壙墓 3



第4図 土壌墓群遺構分布図

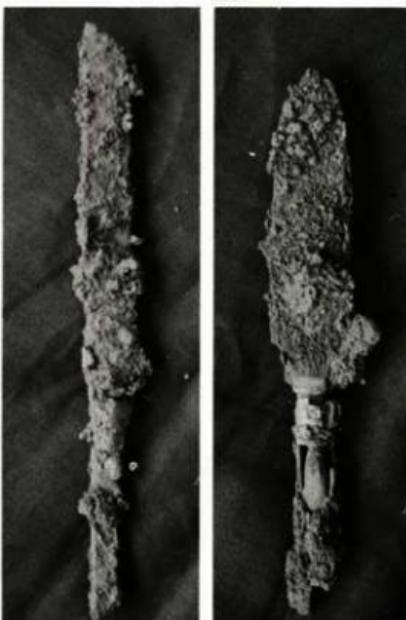


図版10 C区遺跡近景

III. まとめ

川床地区遺跡は、県内では初めて195基を越す、大土墳墓群が検出された。円形・方形周溝墓についても主体部1基の単体埋葬であり、副葬品の中に素環刀など北部九州を中心に出土しているものがあり、また土墳墓について1基も切り合いかなく、その造営法にも配慮がなされている。これまで弥生時代終末から古墳時代にかけての土墳墓は、県内でも2・3例の報告だけであり、日向の古墳出現前夜に位置づけられている川南町東平下遺跡¹¹の円形・方形周溝墓に続く古墳時代前期の墓制を知る上で貴重な資料といえるだろう。

土墳墓群の時期については、A区及びB区西側に鉄斧、無茎鎌と副葬品の中に古い様相が見られる。未整理の段階であるが、出土土師器からもB-49号から東側C-121号に向って造営されたことが窺え、C-121号付近をもってこの土墳墓群の形成が終了したと考えられる。また、新田原古墳群中最高位、最北辺に位置する一群（74号墳付近）の古墳を構成していたと考えられる7号道路区1～2号墳との距離的、時間的空白及び関連についても今後の検討が求められよう。



3. B-72号

4. B-14号



5. B-5号

注1. 川南町教育委員会「川南町の埋蔵文化財」

